■□ 旧伊藤耳鼻咽喉科医院　1932年(昭和7）

建物の前の道路から見上げたところ。ファサードだけ見ると鉄筋コンクリート造のようにも見えるが、側壁は下見板張りで木造なのかと迷う。

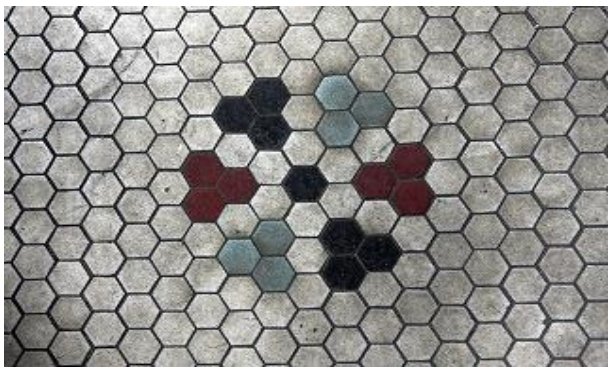
正面を遠望すると木造寄棟いぶし瓦葺であることから、和洋折衷スタイルと判る。

タイルは、窓間の壁に上から下まで伸びて同じ調子で張られ、シンプルなタイル張り装飾になっている。役物を使わなければおさまらないような箇所はあえて避けてあるような使い方ともいえる。

正面玄関を囲む列柱のようなタイル壁。

スクラッチ加工ののち施釉。ワラビと呼ばれる引っ掻き跡を軽く押さえて表面を平らにしてある。特に大きな跡の場合は焼成後に剥離して素地色がのぞくためこうした押さえが必要。

建物のコーナー部分のタイル使いは、曲りなどの役物タイルは使わず、約１８mmほどのタイルの小端面に釉薬を掛けた平物を使って納めてある。役物は平滑なものでも平物の３倍の価格だが、スクラッチ加工のものはより手間がかかる。



玄関の床には6角形の白、黒、赤、水色のモザイクタイルが張られて、有色のタイルで模様張りされている。タイル寸法：対辺長25六角形

病院の処置室で、洗い場も清潔なイメージで当時よくつかわれた白色の硬質陶器タイル150角と75角(15cm四方、7.5cm四方)が張られている

【特 徴】

木造建築ながら、ファサードはタイル張りにし、西洋風の印象を求めたと思われる。スクラッチタイルが大流行した時代で、材料を確保するのも難しかったのではないか。18mm厚の重いタイルを木造下地に張るのも技術を駆使したと思われる。

また1階から2階の軒下まで通しで張られたタイルの重量を地面につながる基礎の上ですべて受け止めて安定させるなど合理的なタイル張りデザインとなっているのが特徴。

スクラッチタイル自体やモルタル目地にはクラックが殆んど無く、またタイルの剥落も見られないことから当時の施工技術の高さが偲ばれる。